

弁才船奉納雛形の木割

正会員 小嶋 良一 *

Kiwari, Design Standards of Japanese Traditional Vessel, on Models of Bezaisen, Typical Wooden Cargo Ship of Edo Era, dedicated to Shrines and Temples

by Ryoichi Kojima, Member

Key Words: Kiwari, Design Standard, Bezaisen, Japanese Traditional Vessel, Dedicated Model

1. 緒 言

日本古来の建築と同じように、和船の設計にも木割書と呼ばれる設計寸法書がある。和船の場合は、帆の反数から諸寸法を決める帆掛かり、積み石数から決める石積み、航（かわら、船底材）の長さから決める尋掛かり、櫓の本数から決める櫓掛かりの四種類がある。

たとえば、帆掛かりについて説明するところである。和船の帆は、幅 2.5 尺ないし 3.0 尺の細長い帆布を横に並べて構成されるが、その 1 枚を反と呼ぶ。千石積みの弁才船では、およそ 24 反程度であるが、帆 1 反につき、船の長さ、幅、深さがいくらか決める手法である。木割書には様々な流派があって、時代や地域によって異なり、一子相伝あるいは一国一人が原則であった。

ところで、我が国各地には寺社に奉納されるなどした多くの弁才船の雛形がある。江戸期の弁才船の実物が現存しない状態において、これらの雛形は弁才船の情報を 3 次元的に今に伝える貴重な遺産となっている。しかし、それらの雛形が本来の弁才船の構造や様式を正確に伝えているか否かは、慎重に見極める必要がある。当初から実船とはかけ離れた船型で雛形を製作する場合もあるし、損傷した部分を誤った方法で修復する場合もあるからで

ある²⁾。

本論文では、その見極め方の一つとして、雛形が木割からみて妥当であるか否かを宝暦以前に製作された雛形を対象に検討してみたので、その結果を報告したい。

具体的には文献³⁾に取り上げられた 14 隻の雛形を対象としてその長さ、幅、深さがどの木割書に近いのか、またはいずれにも当てはまらないか、当てはまるとすれば、製作時代的に妥当なものかなどといった観点から検討を加えた。

和船独特の名称などは文献¹⁾等を参照いただけるものとし本論文では説明を割愛した部分もあることをお断りしておく。

2. 木割書

本論文では江戸前期に成立したものとして以下の 5 種類の木割書を参照した³⁾。

木割書には、主要寸法のほかにも、垣立（かきたつ）、船梁など船体各部の部材寸法や板厚なども示されているが、ここでは弁才船の船型を形作る重要な要素である航長さ、肩幅、深さ及び中棚の開き（Fig.1 参照）に着目して、傾向的な検討を試みることにした。

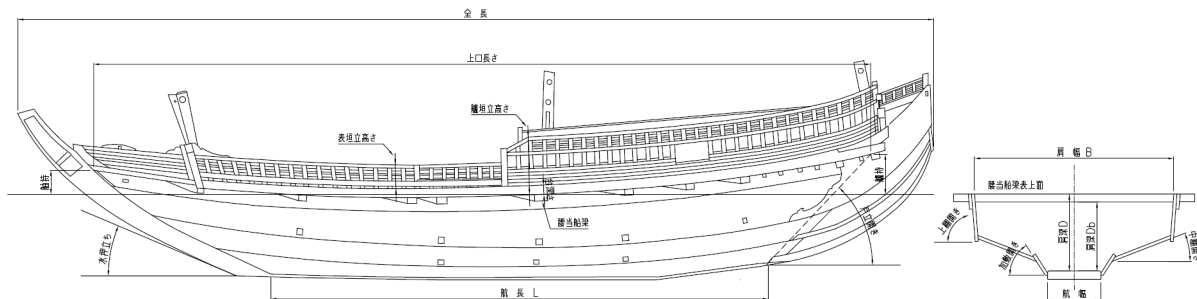


Fig.1 Principal Dimensions of Bezaisen (Left: Profile, Right: Midship Section)

2.1 水浮規矩

対馬藩の船匠中村家が伝えた木割書である。その成立は 17 世紀前期より下ることはないとされている。帆掛かりの木割書である^{3),4)}。

(1) 航長さ

「かわら長さ、壱端二付三尋と置き、二端之時ハ二尺そえ、又三端之時ハ二尺そえ、十端之時ハ三丈三尺と成る次

第」とある。即ち、航を L、帆の反（端）数を S とすると、

$$L = 15 + 2(S - 1)$$

となる。ただし、単位は尺で、1 尋は 5 尺、1 丈は 10 尺である（以下同様）。

(2) 肩幅

「船ノかたハ八尺と置き五端と定め、一尺そえ六端、一尺そえ七端、十端ハ一丈三尺次第」とある。肩幅を B とすると、

$$B = 8 + (S - 5)$$

となる。

(3) 深さ

「ふかさハ船ノかた三ツおりニメ、但、ろとこ下かどニ用」とある。深さは櫓床（この場合は腰当船梁）の下端からはかり、これを Db とすると、

* 関西設計株

原稿受付 平成 31 年 3 月 15 日

公開日 令和元年 5 月 27 日

春季講演会において講演 令和元年 6 月 3, 4 日

©日本船舶海洋工学会

Db = B/3

となる。

2.2 荷方極儀秘伝書

これも帆掛かりの木割書である。原本は明暦3(1657)年の成立と見られている^{3),4)}。

(1) 航長さ

「甞居継立長之事 但、帆壱端ニ付三尺懸」としていて、すなわち、

L=3S

である。

(2) 肩幅

「筒形之事 但、甞長サニツ折ニメ壱分、其内壱端ニ付三尺宛引」、すなわち、

B = L/2 - 0.3S

ただし、「・・・三尺宛引」は「・・・三寸宛引」と解釈した。

(3) 深さ

「筒形深サ之事 但、帆壱端ニ付四寸四分掛」とあって、

D = 0.44 S

である。なおこの深さ D は腰当船梁の上端である。

2.3 荷船法秘書

肥後熊本藩船匠竹内家伝来の木割書で元禄元(1688)年に成立したとされる^{3),4)}。

(1) 航長さ

「三端帆、瓦(航)長四尋弍尺定、八端帆迄ハ壱端ニ付弍尺延(中略)九端帆ヨリ拾壱端帆迄、壱端ニ付壱尺五寸延ヒ(中略)拾壱端帆ヨリ弍十端帆迄、瓦(航)長壱端ニ付壱尺延ヒ」

とあって、すなわち、

3 ≤ S ≤ 9 L = 22 + 2.0(S-3)

9 ≤ S ≤ 11 L = 34 + 1.5(S-9)

11 ≤ S ≤ 20 L = 37 + 1.0(S-11)

となる。

(2) 肩幅

「(四端帆迄ハ)肩、尋ニ付一尺九寸カカリ、(中略)五端帆ヨリ(中略)十壱端帆迄、肩、尋ニ付二尺壱寸カカリ、(中略)弍十端帆迄、(中略)肩、尋ニ付弍尺弍寸カカリ」で、

3 ≤ S ≤ 4 B = (L/5) x 1.9

5 ≤ S ≤ 11 B = (L/5) x 2.1

12 ≤ S ≤ 20 B = (L/5) x 2.2

となる。

(3) 深さ

三端帆より二十二端帆までの寸法書が書かれているがまとめると次のようになる³⁾。

3 ≤ S ≤ 4 Db = (L/5) x 0.56

5 ≤ S ≤ 9 Db = (L/5) x 0.66

9 ≤ S ≤ 11 Db = (L/5) x 0.75

11 ≤ S ≤ 20 Db = (L/5) x 0.76

2.4 荷船石積寸法仕書

成立は享保初(1716)年を下らないと見られている。この木割の特徴は、航長さや深さを積み石数(K)から算出し、それらに基づいて肩幅を計算する手法をとっていることである。表現が若干複雑なので、数式表現のみにて Table 1 に示す³⁾。

Table 1 Design Standard (Nibune Kokutsumori Sunpou Sihou-sho)

210 ≤ K ≤ 300	: L = 35.0 + 0.3 × (K - 210) / 10 - 1.0
300 ≤ K ≤ 600	: L = 37.7 + 1.22 × (K - 300) / 50 - 1.0
600 ≤ K ≤ 1000	: L = 45.0 + 0.8 × (K - 600) / 50 - 1.0
1000 ≤ K ≤ 2000	: L = 51.4 + 0.9 × (K - 1000) / 100 - 1.0
30 ≤ K ≤ 40	: D = 2.35 + 0.25 × (K - 30) / 10 + 0.05
50 ≤ K ≤ 110	: D = 2.80 + 0.15 × (K - 50) / 10 + 0.05
110 ≤ K ≤ 200	: D = 3.70 + 0.1 × (K - 110) / 10 + 0.05
200 ≤ K ≤ 300	: D = 4.60 + 0.07 × (K - 200) / 10 + 0.05
300 ≤ K ≤ 500	: D = 5.30 + 0.25 × (K - 300) / 50 + 0.10
550 ≤ K ≤ 1000	: D = 6.30 + 0.17 × (K - 500) / 50 + 0.10
30 ≤ K ≤ 300	: B = 3.00 × D + 0.15
300 ≤ K ≤ 1000	: B = 3.00 × D + 0.30
1100 ≤ K ≤ 1300	: B = 2.50 × L / 5 + 0.3
1400 ≤ K ≤ 2000	: B = 2.60 × L / 5 + 0.3

2.5 荷方船造り法

対馬藩の中村氏が倉橋島の船大工から入手したとされる木割書で、享保期(1716~1735)に成立したとされる。これも、航長さや深さを積み石数から算出し、それらに基づいて肩幅を算出する手法である。これも数式表現にて Table 2 に示す。

Table 2 Design Standard (Nikata Hune Tsukuri-ho)

0 ≤ K ≤ 100	: L = 30.0 - 1 × (100 - K) / 10
100 ≤ K ≤ 200	: L = 30.5 + 0.45 × (K - 100) / 10 - 0.5 × K / 100
200 ≤ K ≤ 300	: L = 35.0 + 0.3 × (K - 200) / 10 - 0.5 × K / 100
300 ≤ K ≤ 500	: L = 38.0 + 1.15 × (K - 300) / 50 - 0.5 × K / 100
500 ≤ K ≤ 750	: L = 42.6 + 1 × (K - 500) / 50 - 0.5 × K / 100
750 ≤ K ≤ 1000	: L = 47.6 + 0.8 × (K - 750) / 50 - 0.5 × K / 100
1000 ≤ K ≤ 1500	: L = 51.6 + 1 × (K - 1000) / 100 - 0.5 × K / 100
1500 ≤ K ≤ 2000	: L = 56.6 + 0.8 × (K - 1500) / 100 - 0.5 × K / 100
0 ≤ K ≤ 100	: D = 3.30 - 0.1 × (100 - K) / 10
100 ≤ K ≤ 200	: D = 3.30 + 0.12 × (K - 100) / 10 + 0.15 × K / 100
200 ≤ K ≤ 300	: D = 4.50 + 0.08 × (K - 200) / 10 + 0.15 × K / 100
300 ≤ K ≤ 500	: D = 5.30 + 0.25 × (K - 300) / 50 + 0.15 × K / 100
500 ≤ K ≤ 750	: D = 6.30 + 0.18 × (K - 500) / 50 + 0.15 × K / 100
750 ≤ K ≤ 1000	: D = 7.20 + 0.16 × (K - 750) / 50 + 0.15 × K / 100
1000 ≤ K ≤ 1500	: D = 8.00 + 0.27 × (K - 1000) / 100 + 0.15 × K / 100
1500 ≤ K ≤ 2000	: D = 9.35 + 0.25 × (K - 1500) / 100 + 0.15 × K / 100
0 ≤ K ≤ 100	: B = 11.0 - 0.5 × (100 - K) / 10
100 ≤ K ≤ 200	: B = 11.0 + 0.25 × (K - 100) / 10 + 0.05 × K / 100
200 ≤ K ≤ 1000	: B = 3.0 × D + 0.05 × K / 100
1000 ≤ K ≤ 1400	: B = 2.5 × L / 5 + 0.05 × K / 100
1400 ≤ K ≤ 2000	: B = 2.6 × L / 5 + 0.05 × K / 100

3. 対象とした雛形

本論文で取り扱う、元禄期から宝暦期までに奉納された弁才船の雛形 14 隻を Table 3 に一覧表にして示す。また、Fig.2 には、それらの側面図と Body Plan を示す³⁾。

Table 3 List of Investigated Bezaisen Models

No.	名称	所在地	製作年代	航長	肩幅	深さ	積石数
1	堺市博物館 (豊垣廻船)	大阪府堺市	元禄5 (1692)	39.8	15.8	5.87	370
2	阪島神社	広島県廿日市市	正徳期 (1711-1718)	41.4	21.8	8.15	740
3	日方伊勢部柿本神社 (押廻造り)	和歌山県海南市	正徳5 (1715)	48.7	23.1	7.92	892
4	奈加美神社	大阪府泉佐野市	正徳期? (1711-1718)?	41.3	19.2	7.59	601
5	海田熊野神社	広島県安芸郡	享保2 (1717)	36.8	9.5	3.37	119
6	福良八幡神社	兵庫県南あわじ市	享保期? (1716-1735)?	35.1	10.3	4.03	145
7	庵治住吉神社 (住吉丸)	香川県高松市	享保9 (1724)	61.3	22.8	9.44	1324
8	庵治移八幡神社	香川県高松市	享保期? (1716-1735)?	56.6	26.1	10.3	1523
9	敦賀気比神宮	福井県敦賀市	享保-元文期? (1716-1740)	37.0	15.9	5.45	320
10	杵築若宮八幡社 (八幡丸)	大分県杵築市	元文期? (1736-1740)	36.1	15.8	5.48	314
11	津田実相寺 (観音丸)	香川県さぬき市	享保-寛延期? (1716-1751)?	40.6	19.9	7.92	643
12	甘木豊山神社 (金一丸)	福岡県朝倉市	寛延2 (1749)	37.0	13.9	5.35	273
13	高見八幡宮	香川県仲多度郡	宝暦5 (1755)	43.5	20.2	7.92	689
14	玉名外崎住吉神社	熊本県玉名市	宝暦9 (1759)	44.5	21.5	7.89	756

(注1)雛形の縮尺はいずれも1/10である。
(注2)航長、肩幅、深さはいずれも実船換算で、単位は上段が尺、下段がメートルである。
(注3)積石数の単位は上段が石、下段は敷貨重量換算した重量トン数である。
(注4)製作年代に「？」が付いているのは文献³⁾による推定である。
阪島神社雛形で「正徳」とあるのは墨書が奉納年まで判読できなかったことによる。

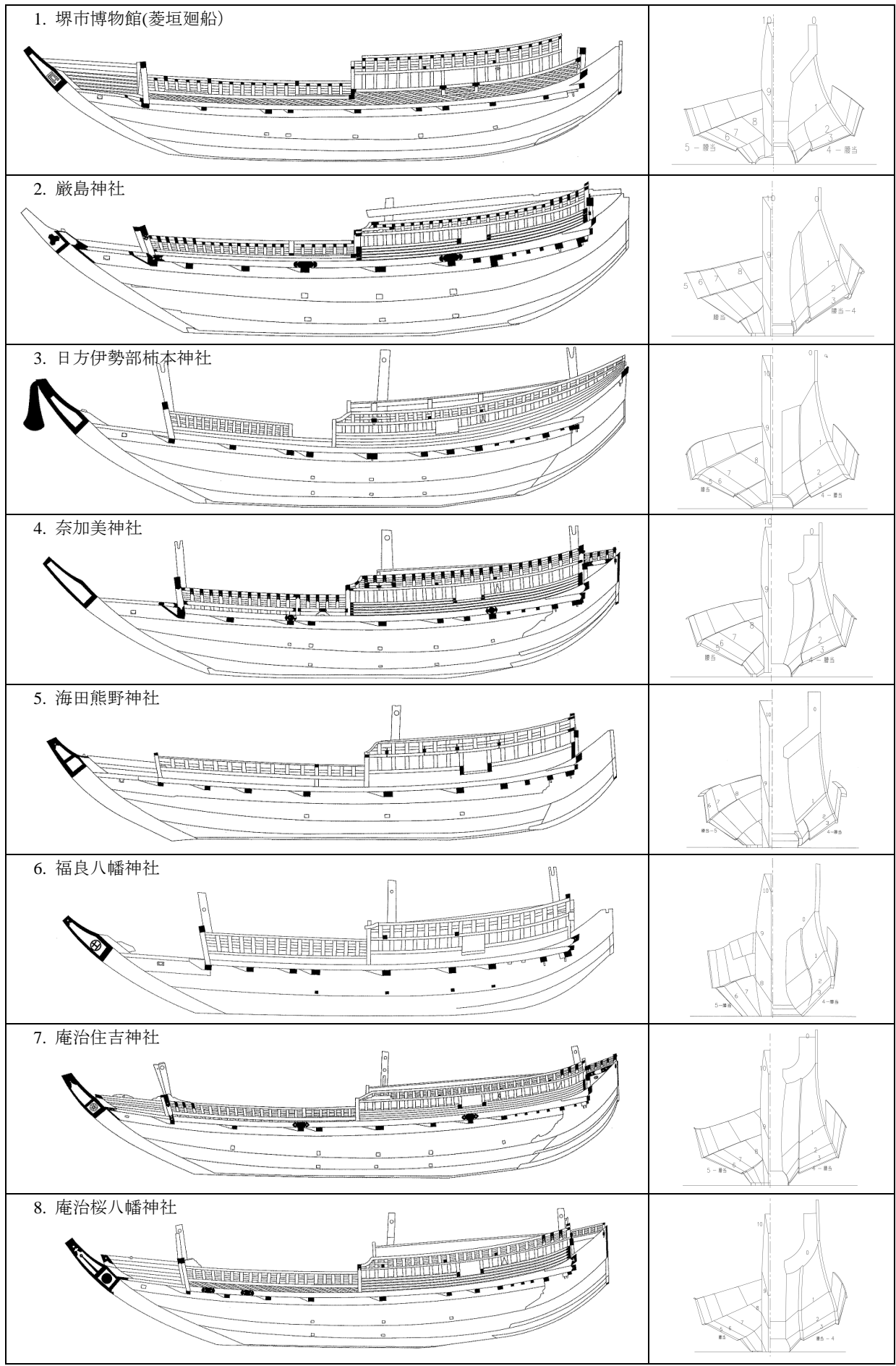


Fig.2 Profiles and Body Plans of Investigated Bezaisen Models

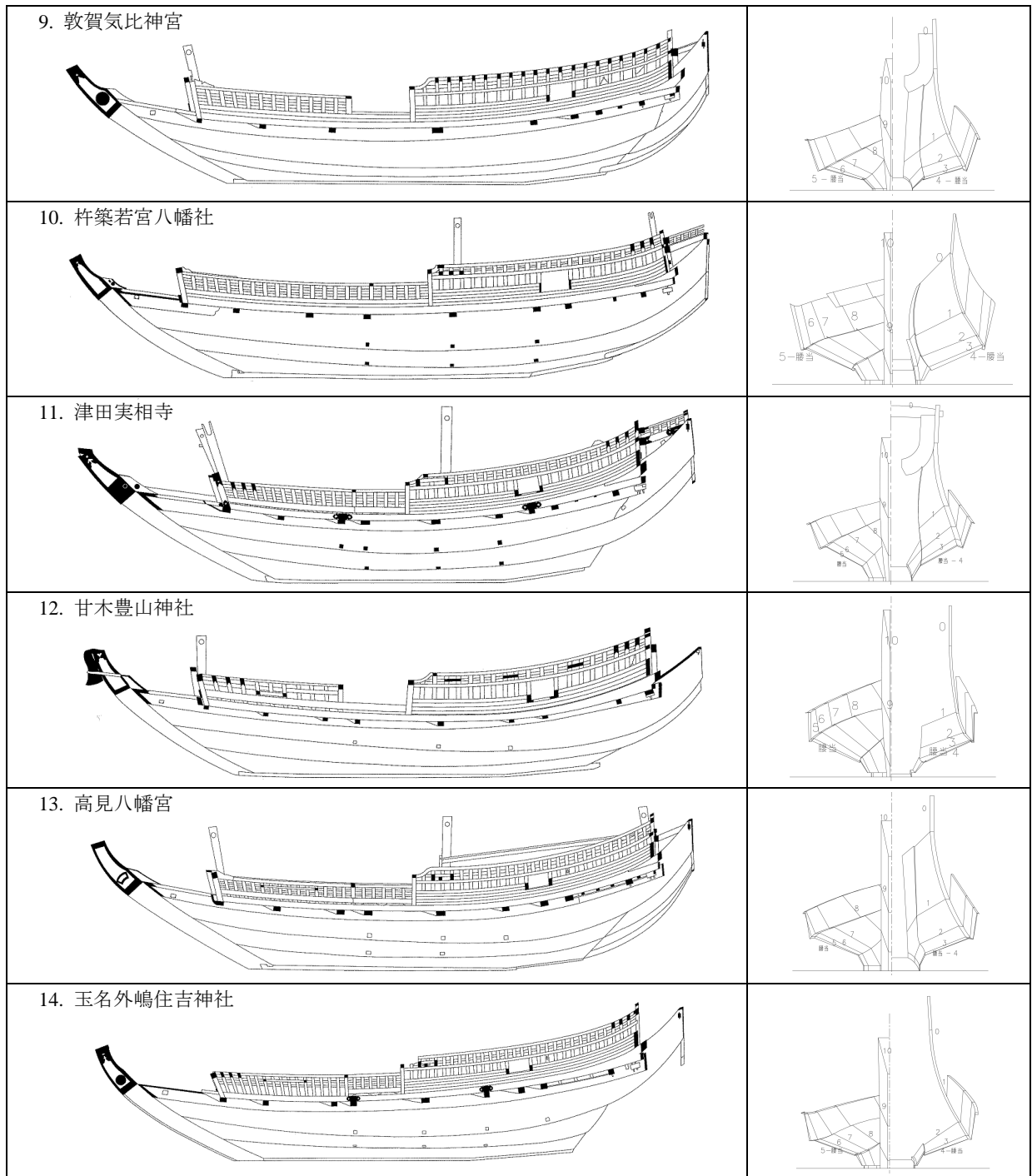


Fig.2 Profiles and Body Plans of Investigated Bezaissen Models (continued)

4. 検討方法

取り上げた奉納雛形が、木割に則っているか否かは次のように検討した。

4.1 航長さ、肩幅、深さ

(1) 帆掛りの木割

いずれの雛形も帆は現存せず、その反数は不明である。そこで、雛形の航長さの実測値をもとに、帆の反数を逆算し、得られた反数に相当する肩幅と深さを求めて、各木割書との整合性を検討した。

(2) 石積りの木割

雛形の航長さ、肩幅、深さの計測値から、実船のそれらを尺単位で L , B , D と表し、

$$K = L \times B \times D / 10$$

この式により、大工間尺と呼ばれる積み石数 K が求められる。この値をもとに各木割書から、 L , B , D をもとめ雛形のそれらの値と比較することとした。

4.2 中棚の開き

各木割書には、船の規模にかかわらず、数値で示されているのでこれらと比較して検討する。

5. 検討結果

以上の要領で検討した結果を Table 4 および Fig.3 にまとめる。なお、木割書における深さの基準点の相違は、すべて D (腰当船梁上面基準) に補正した。

また、Table 4 には雛形と木割書による肩幅、深さ及びそれら実測値の木割書に対する比を示した。

Table 4 Results of Comparing Breadth and Depth of Models with those Obtained by Kiwari-sho

		水浮規矩	(明暦本) 荷 方極儀秘伝書	荷船法秘書	荷船石積寸法 仕法書	荷方船造り法
堺市博物館	B	雛形	15.8	15.8	15.8	15.8
		木割	16.4	15.9	17.0	18.2
		雛形/木割	0.96	0.99	0.93	0.87
	D	雛形	5.9	5.9	5.9	5.9
		木割	5.8	5.8	6.2	6.0
		雛形/木割	1.00	1.00	0.94	0.98
麻島神社	B	雛形	21.8	21.8	21.8	21.8
		木割	17.2	16.6	18.9	19.0
		雛形/木割	1.27	1.32	1.15	1.14
	D	雛形	8.2	8.2	8.2	8.2
		木割	6.4	6.1	7.0	6.3
		雛形/木割	1.27	1.34	1.17	1.29
伊勢部楠木神社	B	雛形	23.1	23.1	23.1	23.1
		木割	20.9	19.5	25.2	23.4
		雛形/木割	1.11	1.19	0.92	0.99
	D	雛形	7.9	7.9	7.9	7.9
		木割	8.0	7.1	9.4	7.7
		雛形/木割	0.99	1.11	0.84	1.03
中庄奈加美神社	B	雛形	19.2	19.2	19.2	19.2
		木割	17.2	16.5	18.9	19.0
		雛形/木割	1.12	1.16	1.02	1.01
	D	雛形	7.6	7.6	7.6	7.6
		木割	6.3	6.1	6.9	6.3
		雛形/木割	1.20	1.25	1.11	1.20
海田熊野神社	B	雛形	9.5	9.5	9.5	9.5
		木割	14.9	14.7	15.2	16.2
		雛形/木割	0.64	0.65	0.63	0.59
	D	雛形	3.4	3.4	3.4	3.4
		木割	5.4	5.4	5.6	5.4
		雛形/木割	0.63	0.62	0.60	0.62
福良八幡神社	B	雛形	10.3	10.3	10.3	10.3
		木割	14.0	14.0	14.6	14.9
		雛形/木割	0.73	0.73	0.70	0.69
	D	雛形	4.0	4.0	4.0	4.0
		木割	5.1	5.2	5.4	5.0
		雛形/木割	0.79	0.78	0.75	0.81
庵治住吉神社	B	雛形	22.8	22.8	22.8	22.8
		木割	27.2	24.5	27.0	31.9
		雛形/木割	0.84	0.93	0.85	0.72
	D	雛形	9.4	9.4	9.4	9.4
		木割	10.2	9.0	10.4	10.3
		雛形/木割	0.93	1.05	0.90	0.92
庵治桜八幡神社	B	雛形	26.1	26.1	26.1	26.1
		木割	24.8	22.6	24.9	29.4
		雛形/木割	1.05	1.15	1.05	0.89
	D	雛形	10.3	10.3	10.3	10.3
		木割	9.5	8.3	9.9	9.9
		雛形/木割	1.08	1.24	1.04	1.04
敦賀氣比神社	B	雛形	15.9	15.9	15.9	15.9
		木割	15.0	14.8	15.2	16.4
		雛形/木割	1.06	1.07	1.04	0.97
	D	雛形	5.5	5.5	5.5	5.5
		木割	5.4	5.4	5.6	5.4
		雛形/木割	1.01	1.00	0.97	1.00
杵築若宮八幡社	B	雛形	15.8	15.8	15.8	15.8
		木割	14.5	14.4	14.9	15.7
		雛形/木割	1.09	1.09	1.06	1.01
	D	雛形	5.5	5.5	5.5	5.5
		木割	5.2	5.3	5.4	5.2
		雛形/木割	1.06	1.03	1.01	1.05
津田実相寺	B	雛形	19.9	19.9	19.9	19.9
		木割	17.0	16.4	18.6	18.8
		雛形/木割	1.17	1.22	1.07	1.06
	D	雛形	7.9	7.9	7.9	7.9
		木割	6.3	6.0	6.8	6.2
		雛形/木割	1.26	1.32	1.17	1.27
甘木雲山神社	B	雛形	13.9	13.9	13.9	13.9
		木割	15.0	14.8	15.2	16.4
		雛形/木割	0.93	0.94	0.91	0.85
	D	雛形	5.4	5.4	5.4	5.4
		木割	5.3	5.4	5.5	5.4
		雛形/木割	1.01	0.98	0.97	0.98
高見八幡宮	B	雛形	20.2	20.2	20.2	20.2
		木割	18.2	17.4	20.0	20.0
		雛形/木割	1.11	1.16	1.01	1.01
	D	雛形	7.8	7.8	7.8	7.8
		木割	6.7	6.4	7.3	6.7
		雛形/木割	1.17	1.22	1.07	1.17
玉名外嶋住吉	B	雛形	21.5	21.5	21.5	21.5
		木割	18.7	17.8	21.5	20.5
		雛形/木割	1.15	1.21	1.00	1.05
	D	雛形	7.9	7.9	7.9	7.9
		木割	6.9	6.5	7.7	6.8
		雛形/木割	1.14	1.21	1.03	1.15

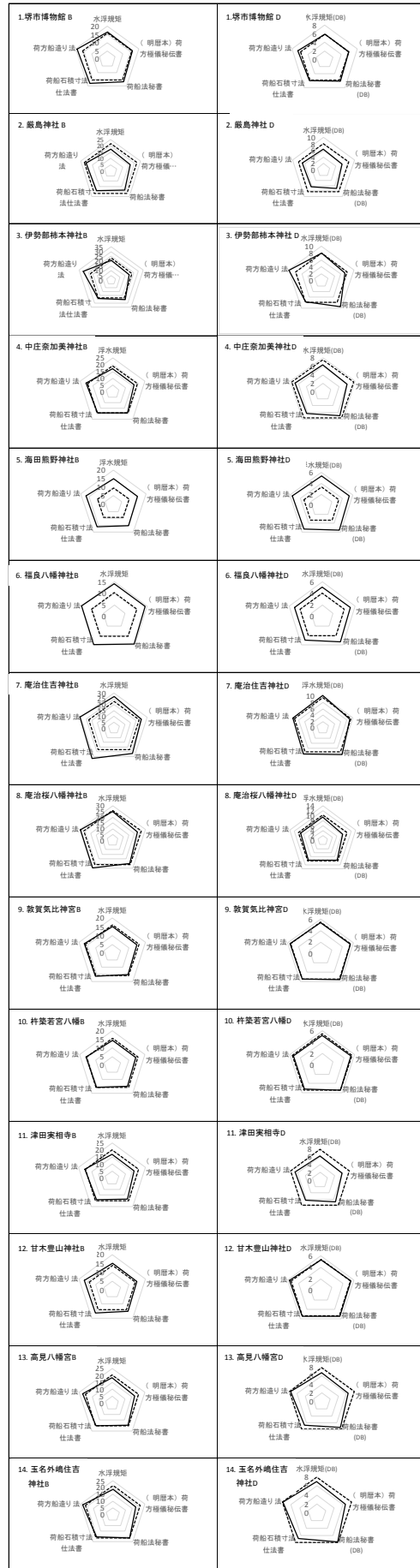


Fig.3 Results of Comparing Breadth and Depth of Models with those Obtained by Kiwari-sho

Fig.3には木割書から得られた値を実線で、雛形の
実測値を破線で示し、どの木割書の値が実測値に近いかを
図示した。単位は尺である。

また、Table 5には中棚の開きに関する比較をまとめた。
表には木割書による値、および雛形の中棚開きとそれとの
比を示してある。なお、水浮規矩は中棚の木割がないため
記載していない。また、海田熊野神社と福良八幡神社の雛
形はLBDの関係が参照した木割書と大きく異なるので対
象から外した。

Table 5 Results of Comparing Inclination of Nakadana of
Models with those Obtained by Kiwari-sho

		(明暦本) 荷 方極儀秘伝書	荷船法秘書	荷船石積寸法 仕法書	荷方船造り法
木割書の開き(寸)		9.2	9.0	9.0	9.6
中 棚 開 き の 比 較	堺市博物館	1.00	1.02	1.02	0.96
	巖島神社	0.90	0.92	0.92	0.86
	日方伊勢部柿本神社	0.97	0.99	0.99	0.93
	中庄奈加美神社	0.98	1.00	1.00	0.94
	庵治住吉神社	1.00	1.02	1.02	0.96
	庵治桜八幡神社	0.96	0.98	0.98	0.92
	敦賀気比神宮	1.04	1.07	1.07	1.00
	杵築若宮八幡社	0.99	1.01	1.01	0.95
	津田実相寺	0.96	0.98	0.98	0.92
	甘木豊山神社	0.99	1.01	1.01	0.95
高見八幡宮	1.01	1.03	1.03	0.97	
玉名外嶋住吉神社	1.02	1.04	1.04	0.98	

Table 4とFig.3をベースに、Table 5も参照しながら各
ひな型と取り上げた木割書の関連を検討する。

(1) 堺市博物館 菱垣廻船雛形

水浮規矩や荷方極儀秘伝書に近いLBDの関係を示して
いる。本雛形が元禄5(1692)年奉納であることから、17世
紀初期から中期のこれらの木割に近いことは妥当性がある。
中棚の開きからみると、後者の木割に矛盾がない。

(2) 巖島神社雛形

いずれの木割からみても雛形の深さが大きい傾向にあ
る。航長さ・肩幅の関係からみると享保期(1716~1735)
の成立と見られる荷方船造り法に近い。本雛形は正徳年間
(1711~1716)の奉納で年代的には近いし、瀬戸内海倉橋
島に伝えられた木割書ということで地域的に関連がある
かもしれない。ただし中棚の開きの一致度は良くない。

(3) 伊勢部柿本神社雛形

荷方石積寸法仕様書の木割に最も近い。同書は享保初
(1716)年以前の成立とされており、奉納時期も正徳5
(1715)で矛盾はない。中棚の開きの一致もよい。本書は
大坂の長谷川孫兵衛の編んだもので、同じ近畿の和歌山の
神社に奉納された雛形に適用されたとしても納得できる。

(4) 中庄奈加美神社雛形

Dについてみると、いずれの木割に対しても雛形の深さ
が大きい。航長さ・肩幅の関連では、荷方石積寸法仕様書
の木割に近いといえよう。また、中棚の開きからみても一
致度は良く、大阪泉佐野の神社という点を考慮しても、大
坂で成立した同木割書との関係があるかもしれない。とす
れば、奉納時期は享保初年(1716)前後となろう。文献3)
では正徳期(1711~1716)前後とみている。

(5) 海田熊野神社雛形

いずれの木割を比較してみても、雛形の肩幅、深さとも
航長さに対して小さい。いわば細長い船型となっている。
119石積みと小さい弁才船であり、ここで取り上げた以外
の木割が適用されているのかもしれない。

(6) 海田熊野神社雛形

同様に、細長い船型である。積み石数は145石であり、

これも別の木割が適用されているのかもしれない。

(7) 庵治住吉神社

取り上げた木割の中では、荷方極儀秘伝書に近い。本雛
形は享保9(1724)年に大坂の船大工によって製作され同神
社に奉納されたことがわかっているの、17世紀中ごろ
の比較的古い木割を踏襲しているのではないかといえる。
中棚の開きも同木割に矛盾がない。

(8) 庵治桜八幡神社

本雛形の奉納年は不詳であるが、LBDの木割からみる
と、荷船法秘書に近い。同書は元禄元(1688)年の成立とみ
られ、奉納時期は18世紀初期を下ることはなさそうであ
る。中棚の傾斜についても同書と大きな差異はない。文献
3)では庵治住吉神社雛形と同時代と推定している。

(9) 敦賀気比神宮雛形

いずれの木割からみても比較的妥当な寸法を示してい
るが強いて言えば、荷方石積寸法仕様書の木割に最も近い。
奉納時期は不明であるが本木割書と関係があるなら享
保期(1716~1735)以降となる。文献3)では享保期後期
から元文期(1736~1740)としている。中棚の開きについ
ても大きく矛盾するところはなさそうである。

(10) 杵築若宮八幡社雛形

複数の木割書との関係が考えられるが、肩幅と深さを併
せてみると荷方船造り法に近いとみられる。奉納時期は不
明であるが、この木割からいけば享保期(1716~1735)以
降ということになる。文献3)では元文期(1736~1740)とみ
ている。中棚の開きについても大きな矛盾はない。

(11) 津田実相寺雛形

航長さに比して、雛形の深さが大きい木割となっている。
肩幅については荷方船造り法に近い。傾向的には巖島神社
の雛形に近い木割の傾向をもっている。とすれば、享保期
(1716~1735)以降の奉納と考えられる。

(12) 甘木豊山神社雛形

寛延2(1749)年奉納とされる。その割には、木割は荷
方極儀秘伝書に近い古いスタイルをとっているように見
える。中棚の開きも同木割に近い。

(13) 高見八幡宮雛形

元禄成立の荷船法秘書か享保の荷方船造り法に近い木
割といえる。奉納時期は宝暦5(1755)年であり、この時代
にしては比較的古い形式の木割を使用したかもしれない。
中棚の開きは特に木割からは逸脱していない。

(14) 玉名外嶋住吉神社雛形

本雛形は宝暦9(1759)年の奉納である。やはり荷船法秘
書か荷方船造り法に近い木割となっており高見八幡宮雛
形と同様な傾向を有している。

6. 結言

江戸前期の奉納雛形と木割の関係について検討したが、
それらに、時代や地域の観点から一定の関連性の存在を認
めることができた。江戸後期のそれらについても
検討ができれば興味深いと考える。

参考文献

- 1) 小嶋良一：栗崎八幡神社の船絵馬，日本船舶海洋工学
会論文集，第26号。
- 2) 石井謙治：和船II，法政大学出版局，pp.282, 1995。
- 3) 安達裕之：雛形からみた弁才船-上，船の科学館，2005。
- 4) 日本海事史学会編：続海事資料叢書第十巻，成山堂，
1986。